

父と母からの贈り物

横浜市立ろう特別支援学校 高校二年 上岡 彩乃

(かみおか あやの)

聴覚障害者である私は、今日まで色々な人に支えてもらいながら生きてきました。頑固で世間知らずの私は、両親にたくさん迷惑をかけて来ました。私には忘れられない二つの言葉があります。どちらの言葉も、幼い頃から両親に耳にタコができるくらい言われ続けてきました。

一つ目は、「何でもいいから、一番になりなさい」という言葉です。この言葉は、今も母に言われ続けています。聴覚に障害がある人は、耳から入ってくる情報が極端に制限されてしまうため、目から獲得する情報で補うことが多くあります。本来なら耳から繰り返し入ってくることによって、使い分け方を学ぶことができる助詞や、文法もなかなか身につけません。そのため、日本語を獲得するのにかかる時間の時間を要し、中には社会人になつてやっと基本的な文法や助詞を使えるようになる人もいます。私も小学生までは、日本語の学習がとても苦手でした。

そうした環境の中、基礎から私に日本語を教えてくれたのは、母でした。母は基本的な事がなかなか身につかない私に、とても熱心にあれやこれやの手段を考え、飽きずに取り組めるように工夫してくれました。例えば、毎日の日課として絵日記を書いたり、絵本を読んで聴かせてくれたり、ある時は、五十音を使って発音や文法の練習を繰り返し指導してくれました。

一番嫌だったのは、発音の練習でした。聴こえないため、「あ」と「か」の何処が違うのか分からないので、毎日母に叱られては「何で何回やつてもできないのだろう。どっちみちできないのだから、もう練習したくない」と泣いていました。ですが、母のお陰で今は五十音それぞれの何処が違うのかが分かるようになりました。

「何でもいいから、一番になりなさい」という母の言葉には、ある願いが込められています。いくら頑張って日本語を身に付けたとしても、一般の人々と同じように行うことができたとしても、障害者というだけで差別を受けてしまう場合があります。しかし、一番になることで誰にも文句を言われず、障害の有無にかかわらず、しっかり自分の道を歩いて欲しいという母の想いが込められています。

幼い頃からこの言葉を何回も教え込まれてきました。母の期待に応えられるように、私は部活動など様々な分野で常に一番になることを目指して頑張ろうと思っています。

そして二つ目は、「前を見なさい」という言葉です。これは、幼い頃から父に言われてきた言葉です。私は幼い頃おてんばで、毎日走っては転んでばかりいました。いつも転ぶ度に決まって父は「前を見ろ」と言っていました。当時は、単に転ばないように周囲に注意を払うようにという意味を込めて言っているかと思っていました。

あれから数年経ち、転ばなくなっても父は常に「前を見ることだけを考えろ」と言い続けています。進路や部活動等の壁にぶつかった時にも父は同じ言葉を繰り返します。私は成長するにつれ、その言葉の真の意味が分かるようになって来ました。

「前を見なさい」この言葉には「先の事を考えて行動しなさい」という父からのメッセージが込められていたのです。性格上、私は先の事を考えず一人で突っ走る所があります。ですが、この言葉を思い出し、まず一度立ち止まって先の事を少しでも考えるように心掛けるように努めています。

言葉には言霊という不思議な力があり、短い言葉の中にもたくさんの方が込められています。言われ続けて来たこの二つの言葉には両親の深い愛情を感じます。

私の将来の夢は、ろう学校の国語の教師になることです。母のお陰で未熟ではありますがですが、基本的な日本語を習得することができました。言語を習得することが難しいという者でも、一生懸命努力すれば目標を達成することができるということを示したいと思います、ろう学校の国語教師を目指しています。

言葉には、一つひとつ異なった意味が込められています。そんな神秘的な面にひかれ、是非とも聴覚障害者にも知って欲しいと思いました。教師になることは、私の夢であり、父や母への恩返しでもあります。

十七年の時を経て、やっと目指す道が決まった今の私にとって、物心ついた時から言われ続けている両親からの二つの言葉がとても励みになります。その言葉を胸に、私は勉強や部活動など様々な分野で頑張ります。もし、教師になれたら両親にこう言おう。

「お父さん、お母さん、ありがとう。ずっと言われ続けて来た二つの言葉が無かったら、今の私は無かったかも知れない。私は今まで二つの言葉に支えられながら生きてきました。やっとその夢をつかみ、叶えたよ。障害者である私をここまで育ててくれて本当にありがとう」と、心を込めて伝えよう。